



No. 19 (2009年1月発行) 発行：北海道海洋生物科学研究会

1. 新年の挨拶	尾島 孝男 (代表幹事)
2. 第7回シンポジウム (平成20年度) 【報告】	第7回シンポジウム実行委員会
3. 第8回シンポジウム (平成21年度) の予定 (重要)	第8回シンポジウム実行委員会
4. 事務局だより	

1. 新年の挨拶

北海道海洋生物科学研究会代表幹事

尾島 孝男

米国発世界同時不況の嵐の中で2008年は暮れ、米国オバマ新大統領の”Change”への期待の中で2009年は開けたように思います。北海道海洋生物科学研究会会員の皆様におかれましては、本年が新たな進展をもたらす希望の一年となりますよう心からお祈り申し上げます。

さて、幹事の栗原先生から年初に当たって何か書くようにとのご指示を頂きましたので、昨年12月6日(土)に神戸の「西宮酒造(日本盛)酒蔵通り記念館」で開催された農芸化学会関西支部会の懇親会で拝聴した、京都大学名誉教授H.C.先生のお話をご紹介したいと思います(記事にすることについて先生のご了解をとっておりませんので、お名前はイニシャルとさせて頂きました)。

支部会の懇親会は、会場となった日本盛から特撰山田錦大吟醸などの銘酒が振舞われたこともあって大変盛り上がり、華やいだ雰囲気の中で多くの先生がご挨拶に立たれました。H.C.先生はその中のお一人として大変インパクトのあるご発言をなされました。先生は穏やかな笑みを浮かべながらも開口一番、「最近の農芸化学者は金儲けに現(うつつ)を抜き、本当に研究しなければならない問題に真面目に取り組んでいない!」とご発言…。私は驚きましたが、関西支部ではH.C.先生のこのようなご苦言は恒例のことだそうで、皆さん苦笑いしながら耳を傾けておられます。「酵素がタンパク質であることはナタ豆のウレアーゼによって証明されたが、ウレアーゼの基質となるはずの尿素はナタ豆中には存在しない。何故か?」、あるいは「糖質からではなく脂質からバイオエタノールを作るのはどうすればよいか?」など、ご挨拶の中で次々と質問を投げかけられ、最後に「若い皆さん、生物の不思議さ面白さにこだわって研究を続けて下さい」との励ましでご挨拶を終えられました。

ご挨拶の後、H.C.先生にもう少しお話を伺うことができました。先生いわく、「自然科学を志す者には見失ってはならない『現(うつつ)』がある。それは『未解明のものを解明し、未整理のものを整理し、それを論文にすることによって社会に貢献する』こと」。H.C.先生は当年84歳とのことですが、この作業は延々と続いておりこれからもまだまだ続くのだそうです。私が52歳であることが分ると「君、私の年齢になるまでまだ30年以上ある。これからが大変だがしっかりやりなさい」と励まされてしまいました。

最近、外部資金の取得や点検評価などに時間を割かねばならないことも多く、本来取り組むべき研究が後回しになっているようにも思います。H.C.先生のお話によればそれが「現を抜かして」いる状況なのかも知

れません。本年は「現」を見据えてしっかりと仕事に取り組み、研究会の皆様とも海洋生物の不思議さや面白さについて有意義な研究交流ができるよう心がけたいと思います。なお、先の研究会において本会の代表幹事をエコニクス佐々木 達 氏から私が引き継ぐことをご承認いただきました。微力ながら研究会の進展に尽力する所存でおりますので、本年も会員の皆様のご理解とご協力をよろしくお願いいたします。



2. 第7回シンポジウム（平成20年度）【報告】

第7回シンポジウム実行委員会
委員長 伏谷 伸宏（北大院水）
（文責 栗原 秀幸（北大院水））

平成20年度シンポジウムは函館市の北海道大学大学院水産科学研究院において開催されました。当日は他の講演会等もございましたが、85名の参加者があり、活気ある討論が行われました。6人の先生の講演はどれも大変興味深く、勉強になるシンポジウムとなり感謝申し上げます。以下に概要を書きましたが、論旨と異なる場合はご容赦いただければ幸いです。

1. 日時 平成20年11月7日（金）
2. 場所 北海道大学大学院水産科学研究院 マリンサイエンス創成研究棟1階 オープンスペース
3. シンポジウム 「北海道の海洋生物科学研究のトピック」

【講演順と概要】

1. 尾島 孝男 先生（北海道大学大学院水産科学研究院）

「海産無脊椎動物の多糖類分解酵素とその応用」

海産無脊椎動物の多糖類分解酵素として、アルギン酸リアーゼ、セルラーゼ、ラミナリナーゼに関する研究成果が紹介された。分子生物学的手法により過去には達成できなかった酵素の純化とそれらを用いた酵素化学的特性が明らかにされた。多糖類分解酵素の加水分解活性と糖転移活性に関する詳細な研究と「パズル」のような多糖分解経路の推察も紹介された。

2. 四ッ倉 典滋 先生（北海道大学北方圏生物フィールド科学センター室蘭臨海実験所）

「コンブ類の系統と種分化」

北海道やその周辺のコンブ類がわかりやすく紹介された。北海道沿岸のコンブは形態学的な面から13種類（世界に30種ほど）とされているが、遺伝的多様性は乏しく、分子系統学的解析から4つのグループに分かれるとのことでした。さらに、マコンブ・ホソメコンブ・リシリコンブ・オニコンブを単一種とする提案や、ゴヘイコンブを除いて慣れ親しんだ *Laminaria* 属などから *Saccharina* 属に移す提案がなされているなど最近の動向も紹介された。

3. 山家 秀信 先生(東京農業大学生物産業学部)

「サケ科魚類の性フェロモン」

これまでの魚類の性フェロモンに関する研究事例が紹介されたあと、サケ科魚類の性フェロモンに関する成果が紹介された。巧みな魚の行動試験を確立して、その試験結果から、成熟オスを興奮させ誘引する排卵メス尿中の性フェロモンを L-キヌレニンと同定されたことや本物質を用いた詳細な検討例もあわせて紹介された。

4. 山口 篤 先生(北海道大学大学院水産科学研究院)

「北海道周辺のプランクトン群集の特徴」

北海道周辺海洋環境の紹介とともに、それぞれの海域でのプランクトン群集の特徴を分かりやすく紹介された。日本海の対馬暖流域と日本海固有水の上下構造、オホーツク海の密度躍層、太平洋岸の冷水と暖水の構造とプランクトン群集の特徴が話され、北海道周辺は時空間的に多様なプランクトン群集が存在することが紹介された。

5. 平松 尚志 先生(北海道大学大学院水産科学研究院)

「魚類のリポタンパク質と受容体に関する研究」

魚卵の主要な成分はリポタンパク質と中性脂質であり、魚類の卵形成の過程でのそれらの動向が紹介された。卵の主要成分であるピテロゲニンには複数の分子種が存在して、複数の受容体を介した卵内への蓄積、卵黄タンパク質・脂質の特異的な分解等が認められ、非常に緻密な制御の下で行われていることが明らかにされ、複雑な卵形成過程のモデルを提唱していることが紹介された。

6. 笠井 久会 先生、吉水 守 先生(北海道大学大学院水産科学研究院)

「水産物の安全性確保と安心感の提供—安心・安全な道産サケ製品の生産について—」

食品の安全や安心が注目され、水産業においても、1次生産者としての衛生管理の重要性が紹介された。漁船→漁港→流通の各段階での衛生管理のための要素技術の検討事例とそれらの総合的な管理やトレーサビリティの重要性が紹介された。



3. 第8回シンポジウム(平成21年度)の予定(重要)

(文責 栗原 秀幸(編集担当))

例年より半年早い開催になりますが、季節の良い時期に次回シンポジウムが札幌医科大学の高橋先生を中心に計画されております。他の学会等ではなかなか開催されない地でのシンポジウムになりますので、是非会員の皆様はじめ、周りの方々にお声をかけていただき、多くの参加者が集うことを期待しております。予定表にぜひ記入しておいてください。なお、本シンポジウム・総会への参加希望、懇親会参加の人数確認は4~5月頃になる予定です。現在は予定の段階ですので、詳細は今後送付される案内をご参照ください。

第8回北海道海洋生物学科学シンポジウム

(平成21年度札幌医科大学医学部附属臨海医学研究所第1回公開講座)

のお知らせ (予定)

第8回北海道海洋生物学科学研究会シンポジウム (平成21年度) 実行委員会
委員長 高橋 延昭 (札幌医科大学)

花の季節に皆様を利尻島にお迎えできますことを大変嬉しく存じております。今年も昨年話題をさらったクラゲが実際に人の研究にどのように応用されているかの最先端の研究を紹介していただき、それに続きクラゲの仲間たちの面白い生活史を見ていこうと思っています。遠路、北の海まで大変でしょうが、皆様のご来島を心からお待ち申し上げます。

記

テーマ：クラゲ類の不思議な生活史とノーベル賞への貢献

日時：平成21年6月19日 (金曜日) 15:00~17:10

場所：利尻島開発総合センター (利尻富士町)

対象：中高生および島民も含めます。

後援：利尻富士町、利尻富士教育委員会

スケジュール：

- | | |
|-------------|--|
| 15:00~15:05 | 開会の挨拶 (代表幹事) |
| 15:05~15:35 | 一宮慎吾 (札幌医大病理)
「クラゲ蛍光蛋白の科学への貢献 (バイオイメージング) と ノーベル賞 (仮題)」 |
| 15:35~16:05 | 三宅裕志 (北里大海洋)
「クラゲの秘密」 |
| 16:05~16:35 | 高橋延昭 (札幌医大臨海)
「コンブのヒゲ (腔腸動物ヒドロ虫類) について」
(利尻島紹介) |
| 16:35~17:05 | 小杉和樹 (利尻町・日本野鳥の会道北支部)
「利尻島の四季 (仮題)」 |
| 17:05~17:10 | シンポジウム終了の挨拶 (実行委員長) |
| 17:10~17:30 | 北海道海洋生物学科学研究会総会 |



懇親会：

18：30～20：00

「あや瀬（ホテル）」（利尻富士町鷺泊字栄町；電話 0163-82-1560）
会費 5,000 円（ウニ土瓶蒸し、昆布うどん等），当日受付。

宿泊場所：

利尻島ファミリーキャンプ場「ゆ～に」のコテージ（5 人用）を考えています。一人 1 泊約 3,500 円

食事：

外食か仕出し弁当（学生実習の時利用）の予定です。

温泉：

コテージから歩行 3 分。20：30 まで入館のこと。

ホテル宿泊希望の場合：

各自予約のこと（利尻富士町ホームページ参照）。

島への交通機関：

各自予約のこと。

エクスカージョン：

島一周考慮中。

登山：

20 日の飛行機は午後 2 時頃発着（注意されたし）。フェリー最終 17：30 頃十分間に合う。

その他：

この季節は花の季節、しかし、東風が吹くと息が白くなるほど気温が下がります。晴れたら、一面、エゾカンゾウのオレンジ色を見られるかも知れなません。観光シーズンの真っ只中なのでホテル宿泊者および交通の予約はお早めをお願いします。

問い合わせ先：

高橋延昭（tel&fax:0163-82-1250, e-mail:ensho@sapmed.ac.jp）

川井唯史（tel:0162-32-7188, e-mail:kawaita@fishexp.pref.hokkaido.jp）

編集担当注：あくまでもシンポジウムですが。。。以下にガイドがあります。

天然色の楽園 — RISHIRI-ISLAND(利尻島) — 利尻・礼文・サロベツ国立公園の観光ガイド
(<http://www.rishiritou.com/>)



4. 事務局だより

1) 会員募集

個人の会員はもとより、団体としての入会も歓迎します。ぜひ、賛助会員第1号になっていただける方にお声をかけてください。なお、入会希望の方には払い込み票をお送りしますので、ご連絡下さい。

年会費：一般会員 1,000円、学生会員 500円、賛助会員（団体）10,000円

会費振込先 郵便振替口座番号 02700-1-93161 加入者名 北海道海洋生物科学研究会

2) 会員の動向

下記の方がご入会になり、会員数が37名となりました。

北海道大学大学院水産科学研究院 山口 篤氏

北海道大学大学院水産科学研究院 笠井 久会氏

退会者 津田正史氏 堀田清氏 佐藤昇志氏

住所・所属先の変更がございましたら、事務局までお知らせ下さい。

3) 会計報告

平成19年度会計報告は以下の通りです。平成20年11月に開催された総会で承認されました。

平成19年度収入

会費	29,500円
繰り越し	62,228円
計	91,728円

平成19年度支出

事務用品	10,269円	(主にニュースレター印刷費)
送料	2,570円	
振替手数料	1,420円	
補助	15,000円	(シンポジウム)
計	29,259円	

20年度へ繰越 62,469円

4) 平成21・22年度幹事会

平成20年11月に開催された総会で、平成21・22年度の幹事会メンバーが下記の通り承認されました。尾島孝男氏(代表幹事)、山下和則氏、栗原秀幸氏、阿部剛史氏(ニュースレター編集委員)、久保田高明氏(会計監査)、沖野龍文(事務局)

・本会に関する問い合わせ・入会希望は、事務局(沖野 龍文) TEL011-706-4519、電子メール okino@ees.hokudai.ac.jp

・ニュースレターへの情報提供・投稿などに関するお問い合わせは、ニュースレター編集担当(阿部 剛史) TEL011-706-4507、電子メール tabe@museum.hokudai.ac.jp までお願いします。

編集後記

早いもので新年が始まりました。本年のシンポジウムは初めて春開催になります。6月の利尻島ではまだ寒い時期かと思いますが、あつい討論で心身ともにあたたかくなればと思います。本号をもって、ニュースレター担当を阿部先生に引き継ぎます。途中さぼった時期もあり、申し訳ありませんでしたが、気長にお待ちいただきありがとうございました。(栗)